

Frederic Henry の虚像

丸 田 明 生

はじめに

A Farewell to Arms は「戦争」と「愛」をテーマに現代の世界を描き出したものといわれる。その中で Hemingway が描いた世界は、神に見棄てられた世界、自然そのままの、何も中心にもたない不毛の砂漠に対する著者の反応であるともいわれてきた。Ray B. West もこの作品の設定に関して次のように述べている。

…the setting for *A Farewell to Arms* is the war itself, and the romance of Frederic Henry and Catherine Barkley, their attempt to escape the war and its resulting chaos, is a parable of twentieth-century man's disgust and his disillusionment at the failure of civilization to achieve the ideals it had been promising throughout the nineteenth century.¹⁾

Abruzzi の若い牧師の優しさと宗教心は嘲笑的にされ、Ettoreや carabinieri は現代文明の冷酷さと非情さを象徴し、Myersはごまかしの競馬で利益を追求し、Milan の病院の婦長の Miss Van Campen は人

1) Ray B. West, *A Farewell to Arms*, reprinted in Carlos-Baker's *Ernest Hemingway: Critiques of Four Major Novels* (Charles Scribner's Sons, 1962), p. 28.

間をその社会的地位で評価する。Rinaldi は syphilis にかかり、Aymo は戦場で味方の兵隊に撃たれ、そして Frederic の恋人 Catherine も著者によれば「生物学的な畏」のために死んでいく。そして Frederic 自身も幻滅の中に感覚の世界をさまよっているのである。

カフェの煙草のけむりと部屋がぐるぐる廻り、それを止めるのは壁を眺めている以外仕方がない、そういった夜の方へ出かけていったのだった。よっぱらってベッドの中で寝ている夜だ。あとは何もわからず、分っているのはそれだけだ。目覚めて一緒にいるのが誰なのかわからない。そのふしぎな興奮。暗闇の中のまるっきり非現実的な世界。非常に興奮しているので夜になると誰ともわからず、何もかまわず、又同じことをつづけねばならない。これがすべてで、すべてで、あとは何もかまわない。それだけが今はっきりしていることなのだ (I had gone to no such place but to the smoke of cafés and nights when the room whirled and you needed to look at the wall to make it stop, nights in bed, drunk, when you knew that that was all there was, and the strange excitement of waking and not knowing who it was with you, and the world all unreal in the dark and so exciting that you must resume again unknowing and not caring in the night, sure that this was all and all and not caring [17])。²⁾

そしてこの現代文明に対する告発は、Hemingway の *Green Hills of Africa* の中でも次のようになされている。

A continent ages quickly once we come. The natives live in harmony with it. But the foreigner destroys, cuts down the trees, drains the water, so that the water supply is altered and in a short time the soil, once the sod is turned under, is cropped out and, next it starts to blow away as it has blown away in every old country and as I had seen it start to blow

2) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (Jonathan Cape, London, 1946). 引用文末の [] 内の数字はすべて本書の頁数をしめす。

in Canada. The earth gets tired of being exploited. A country wears out quickly unless man puts back in it all his residue and that of all his beasts. When he quits using beasts and uses machines, the earth defeats him quickly. The machine can't produce, nor does it fertilize the soil, and it eats what he cannot raise. A country was made to be as we found it. We are the intruders and after we are dead we may have ruined it but it will still be there and we don't know what the next changes are. I suppose they all end up like Mongolia. ³⁾

18世紀の知性主義のお上品振ったヴェールにつつまれた文明に対する嫌悪の烽火は既に19世紀の英国の浪漫詩人達が自然への逃避とあこがれのかたちで行なっているが、Hemingway のアメリカへの嫌悪と、アフリカへの憧憬も、彼の第一次大戦の経験の中で開眼されたということが出来よう。しかし私はここで Hemingway が果してこの現代文明を真に批判し得たか、彼が批判した刃は、又彼に対しても向けられねばならない両刃の刃ではないかを、*A Farewell to Arms* の中に分析してみたい。

Frederic と戦争

この作品は五部から成っているが、その中程第三部で、主人公 Frederic Henry がミラノの病院から前線に復帰した時牧師と久し振りに再会する場面がある。そこで彼は牧師に向かって『我々がクリスチャンになるのは敗北の時ですよ。——我が主のような。……今我々がやられているからみんなやさしくなっているんですよ』（“ ‘It is in defeat that we become Chrisitan — like our Lord, …… We are all gentler now because we are beaten’ ” [180]）といて、戦争に勝っている

3) Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (Jonathan Cape, 1965), p. 274.

人間、つまり支配の側に立つ人間には人間としてのやさしさや、主の御心を心とする人間はいないことをほのめかしている。そして勿論彼もその牧師の側に立つ、即ち牧師と同じく早くみんなが主の御心に立ちかえり戦いの終結を望んでいることは、この作品の冒頭の将校達がこの牧師をからかう場面の彼の態度から明らかである。しかしながら、彼はこのように述べた舌の根も渴かないうちに、牧師に対して、『しかし私は敗北を信じません』（“‘But I don’t believe in defeat’” [181]）、というまさに読者を戸惑わせるような言葉を吐くのである。なる程これは例の有名な“A man may be destroyed but not defeated”⁴⁾を想起させるが、これでは Frederic が果して我々がクリスチャンになれない戦争を嫌っているのか、それともただ敗北を嫌っているのか理解に苦しまざるを得ない。そして多分彼にとっては、むしろクリスチャンになれなくとも、敗北よりは勝利を志向しているのではないか、という推論へ我々は導かれる。そして更にこのことはこの作品の初めの部分で、彼が運転手達と議論している次の言葉をもって立証することが出来そうである。戦争というものが如何にくだらなものであっても『敗北はもっと悪い』（“‘Defeat is worse’” [54]）、のである。そしてこの原理をおし進めていく時「単独講和」（“Separate Peace”）は主人公にとって一体存在し得るであろうか。

しかし Frederic Henry はタリアメント河に飛びこむことによって「単独講和をしていたのだ」（“I had made a separate peace” [246]）、と宣言する。もしそうだとすれば、少くとも彼は「平和」の側に立つことになり、ここで勝利を捨てたことになる。しかし『勝っているうちは誰も戦争を止めはしませんでしたよ』（“‘No one ever stopped when they were winning’” [180]）、と牧師に語る Frederic の自信に満ちた口振りからすれば、戦争を止めた彼は結局敗北したことになるではな

4) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (Jonathan Cape, 1965), p. 103.

いか。

憲兵の銃殺をのがれてタリアメント河に飛び込み、「単独講和」を結んだ Frederic Henry の動機は、次のように理由づけがなされている。

The questioners had all the efficiency, coldness and command of themselves of Italians who are firing and not being fired on.

“Your Brigade ?”

He told them.

“Regiment ?”

He told them.

“Why are you not with your regiment ?”

He told them.

“Do you not know that an officer should be with his troops?”

He did.

That was all. Another officer spoke.

“It is you and such as you that have let the barbarians on to the sacred soil of the fatherland.”

“I beg your pardon,” said the lieutenant-colonel.

“It is because of treachery such as yours that we have lost the fruits of victory.”

“Have you ever been in a retreat ?” the lieutenant-colonel said [228].

Frederic の心境はこの中佐の最後の抵抗の一言で代弁されている。それは退却においては部下を見捨てることも止むを得ないということであろう。そして Frederic も又、この河畔まで彼に従がい、彼を信じてついてきた部下を突如として見捨てて濁流にとびこんだのだ。そうしなければ、彼はこの中佐同様銃殺に処せられる故に、絶体絶命の手段であったともいえよう。次の文句はその前哨線として設定されていた。

神聖とか、栄光とか、犠牲とかいう言葉や、空虚な表現には僕はいつも当惑させられた。そういう言葉は、もう久しい以前から何度も聞いたり読んだりしたことがある。ときには両の中に立って、ほとんど声も聞こえない遠くから、ただ喚か

れた言葉だけを聞いたことがあったし、またピラ貼りたちがほかの布告ピラの上にべたべた貼りつけていくびらの文面にそれを読んだことがあった。だが僕は神聖なものなど見たことがなく、栄光ありといわれたものに栄光のあったためしはなかった。そして犠牲とはシカゴの屠殺場のようなもので、ただ肉を埋めることだけが違うにすぎないのだ (I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain. We had heard them, sometimes standing in the rain almost out of earshot, so that only the shouted words came through, and had read them, on proclamations that were slapped up by billposters over other proclamations, now for a long time, and I had seen nothing sacred, and the things that were glorious had no glory and the sacrifices were like the stock-yards at Chicago if nothing were done with the meat except to bury it [186])。

これは Caporetto の大退却が始まる時の Frederic の心境である。而らばこの退却の途中で彼の指揮下から脱走しようとした二人の軍曹に発砲し、その一人を負傷させた上で、やがては又彼の指揮下から去っている Bonello にとどめをささせる——この Bonello の脱走も Frederic は決して肯定してはいないのだが——彼の行為は、どのように解釈すべきであろうか。この二人の軍曹は途中から Frederic の仲間に加わった連中ではある。しかし、彼等が『しばを刈れ』(“I order you to cut brush” [206]) という Frederic の命令に背むいて道を歩き始めた時、それを射殺するという事は、秩序を乱し、掟を破る者に鉄拳を下すタリアメント河の憲兵達と区別出来るであろうか。Frederic の脱走が正当化されるとすれば、これら軍曹の脱走も当然正当化されねばならない。しかるに Frederic は彼等の心中を慮ばかりどころか直ちに発砲という行動に出ている。そして先にものべたように、あとで脱走することになる Bonello を直接の下手人に仕立てあげているのである。それは又更に卑劣な手段と言うべきではなからうか。

“Halt,” I said. They kept on down the muddy road, the

hedge on either side. "I order you to halt," I called. They went a little faster. I opened up my holster, took the pistol, aimed at the one who had talked the most, and fired. I missed and they both started to run. I shot three times and dropped one. The other went through the hedge and was out of sight. I fired at him through the hedge as he ran across the field. The pistol clicked empty and I put in another clip. I saw it was too far to shoot at the second sergeant. He was far across the field, running his head held low. I commenced to reload the empty clip. Bonello came up [206].

憲兵達のもつ「能率性と冷酷さと自己統制」こそまさに Frederic のものなのである。「…… all the efficiency, coldness and command of themselves ……」という表現には、著者のあやしい気酷と気炎が感じられるのである。「退却の中にいたことがありますか」という中佐の言葉は、そのまま軍曹から Frederic に向けられる言葉であってもいい筈である。なる程退却は始めの秩序正しいものから、次第に混乱に陥っていく経過は認められる。しかし Frederic の軍曹に対する発砲は三発であり、しかも威嚇射撃ではない。更に彼は「最も多くしゃべった方の男」に先づ発砲している。それは明らかに彼が Frederic に対して反抗的批判的であったからであり、Frederic は彼の感情によって彼の行為を決定したとも解釈できる。たしかに彼はあとで自分のこの行為を反省し、『それは私の罪だった。私が彼等をここまで連れてきたのだ』("It was my fault. I had led them up here" [208]), と述べるが、それはむしろ彼の仮面というべきであろう。何故なら「太陽が殆んど雲のうしろから顔を出し、生垣のそばに横たわった軍曹の死体」("The sun was almost out from behind the clouds and the body of the sergeant lay beside the hedge" [208]) を照りつけているにも拘らず、彼はそれに何らかの処置をして「クリスチャンになる」どころか、祈りの一つもせず、彼の衣服まではぎ取って彼等の車のタイヤ

の下敷きにして、車を進めようとするのである。これは火に追われて丸太の上を這う蟻に水をぶっかけて蒸し焼きにした Frederic を如実に浮彫りにしている。退却する時にも“Christian” になり得ず、むしろ hostility を感じ、又それを人にも起させる人間に“peace” が存在し得ようか。この点について E. M. Halliday もその矛盾を指摘する。

The climax of this grim comedy is of course Frederic Henry's own desertion. Threatened with military justice akin to that he so summarily had dealt the sergeant, he dives into the Tagliamento River; and his sarcastic remarks on his would-be executioners ring with hypersonic overtones against the battle of the earlier incident……⁵⁾

Ray B. West は、Malcom Cowley が「Frederic が河へ飛びこんだのは洗礼を意味する—— Frederic が世界に開眼する象徴である」(“…… Frederic's plunge into the river to escape exertion as a baptism—a symbol of Frederic's entering the world of the initiated”⁶⁾) と捉えていることを紹介し、それは彼の再生 (rebirth) を意味すると付言している。しかし実際に彼にその再生が果してみられるであろうか。タリアメント河の岸にたどりついた Frederic は人目をはばかり飛び乗ったミラノ行きの無蓋車のズックの覆いの下で次のように思う。

外観にはこだわらなかつたが、それでも軍服は脱ぎ捨ててしまいたかつた。私は星章は取り去っていたが、それは便宜上そうしたのだ。それは名誉の問題ではなかつた。私は星章には反対ではないのだ。ただそれに用がなくなっただけなのだ (I did not care much about the outward forms. I had taken off the stars, but that was for convenience. It was no point

5) E. M. Halliday, “Hemingway's Ambiguity: Symbolism and Irony,” reprinted in Baker's *Ernest Hemingway's Critiques of Four Major Novels*, p. 71.

6) Carlos Baker, *Ernest Hemingway; Critiques of Four Major Novels*, p. 32.

of honour. I was not against them. I was through [237]).

この中にはどんなことがあっても軍服を脱ぎすててしまいたい、という気持はみられない。むしろ星章はつけておきたいのだが止むをえず取り去ったという心理がうかがわれる。星章をはぎ取ったのは将校なるが故に再び捕えられることを恐れたためだけのようである。彼は軍隊に未練があり、星章に未練があり、それ故に名誉にそして栄光に未練があるのだ。しかし現時点では彼はそういうことを「考えるのは兎に角やめなければならない。そして食べなければならない」(“I would eat and stop thinking [237]) のだった。

Frederic が戦場に未練を残し、その講和宣言の真偽を問われる場面は外にいくつかある。例えば Stresa で Catherine と再会する前、ホテルで戦況についてボーイに尋ねられた時、『戦争の話は止めてくれ』(“Don't talk about the war” [248]) と言った後で、「戦争などは遠い世界の出来事だった。多分戦争なんかありやしないだろう。とにかくここには戦争はないんだ。すると僕にとって戦争は終わってしまったことがわかった。しかし僕には本当に終わったような気持はしなかった。僕は学校をずる休みした生徒が今学校では何をしているだろうかと考える時のような気持だった」(“The war was a long way away. Maybe there wasn't any war. There was no war here. Then I realized it was over for me. But I did not have the feeling that it was really over. I had the feeling of a boy who thinks of what is happening at a certain hour at the school house from which he has played truant” [248]) と思わず告白している。そして Catherine と二人でスイスにのがれようとする時、『いつまでも犯罪者のような気持で暮らさなくてすむようになってもらいたいものだ』(“I wish we did not always have to live like criminals” [254]) という Frederic に、『そんなに長い間犯罪者みたいにあなたは生きてはこなかったんだし、これからは決して犯罪者みたいに生きることはない

わ』 (“‘ You haven’t lived like a criminal very long. And we’ll never live like criminals’” [254]) という Catherine の慰めも『俺は犯罪者のような気持だ。軍隊から脱走したのだ』 (“‘ I feel like a criminal. I’ve deserted from the army’” [254]) と効果がない。彼が戦争や憲兵の非を確信し、その中で使われる抽象的な言葉を否定するならば自分を犯罪者と思う理由はどこにもない筈である。

スイスに着いてからは“ criminal” という言葉は使わず、そのような気持は薄れてきたように見えるものの、戦場へと走る心は抑えることはできない。ただそれを考えないようにしているだけである。

“I (Frederic) have a fine time. Don’t we have a good life?”

“I do, but I thought maybe you were reckless.”

“No. Sometimes I wonder about the front and about people I know but I don’t worry.

I don’t think about anything much.”

“Who do you wonder about?”

“About Rinaldi and the priest and lots of people I know.

But I don’t think about much. I don’t want to think about the war. I’ve through with it” [300].

そしてまさに Catherine が息を引きとろうとしている時でさえも Frederic は戦争のことが頭から去らないのである。「僕はビールを何杯か飲んだ。何も考えてはいなかったが向い側の男の新聞を読んだ。それはイギリスの前線が突破されたという記事だった」 (“I drank several glasses of beer. I was not thinking at all but read the paper of the man opposite me. It was about the break through on the British front” [331]) と、最後まで戦争への関心は捨てられていなかったのである。これはただ新聞の戦争記事がたまたま目にとまったととれなくもない。しかしその男が新聞をたたむと、給仕に別の新聞を持ってこさせようと思ったりする。Frederic Henryは、「戦争にさらば」をしたのではなく、逆に「単独講和にさらば」をする結果になってしまう

ったのである。

Frederic と恋愛

我々は *A Farewell to Arms* をその題名からしても、戦争を主要テーマとしたものと思いがちである。しかしこの作品をよく考察してみると純粋に戦争に関する描写は第一部の後半と、第三部の大部分だけであり、第一部の前半、第二部、第四部、第五部は主として恋愛が取扱われているのに気付くのである。その意味でも *A Farewell to (Catherine's) Arms* ともいえる恋愛小説といってもよい。一般的にはこの作品は Frederic が戦争によって象徴される暴力の世界からのがれて、Catherine との愛にしあわせな生活と真の生甲斐を見出した——しかしそれも生物学的な罨にかかって束の間に終わってしまうことになるのだが——ように思われているし、又そのような評価は Hemingway の作法技術によるところが大きいと想像されるけれども、果して Frederic は真に Catherine を愛し得たか、今度はその点を中心に論を進めてみたい。

Frederic が Catherine と “game” のつもりで恋を始めたのは周知の事柄である。最初は Frederic が「くだらないゲーム」(“rotten game” [35]) を演じていることは Catherine 自身の指摘である。そしてやがて Frederic が負傷して病院に入院してくるや否や、彼女を愛していることに気づくというのだ。「僕が彼女を見た時、僕は彼女を愛していた」(“When I saw her I was in love with her” [95])、と Frederic は思う。そして彼女と初夜(実際は夜ではなく昼なのだ)を共にしたあとで——この時の描写は圧巻である——彼は更に彼女に対する愛情を深めているように見える。

「僕が彼女と恋に陥りたくなく思っていたのは神も御存知だ。僕は誰とも恋なんかしたくなかったのだ。しかし本当は恋をしてしまったのだ」(“God knows I had not wanted to fall in love with her. I had not wanted to fall in love with anyone. But God knows I had…” [96])

しかし Arthur Waldhorn も指摘している如く、⁷⁾ Frederic はこの

言葉に即応し、以後の Catherine の献身的な愛情に応える行動をとっているようには思われないのである。

Abruzzi の牧師は、Frederic がこの愛の告白ともいうべきものをする前に彼に愛というものについて次のように語っている。

“It does not matter. But there in my country(Abruzzi) it is understood that a man may love God. It is not a dirty joke.”

“I understand.”

He looked at me and smiled.

“You understand, but you do not love God.”

“No.”

“You do not love Him at all?” he asked.

“I am afraid of Him in the night sometimes.”

“You should love Him.”

“I don't love much.”

“Yes,” he said. “You do. What you tell me about the nights. That is not love. That is only passion and lust. When you love you wish to do things for. You wish to sacrifice for. You wish to serve.”

“I don't love.”

“You will. I know you will. Then you will be happy.”

“I am happy. I've always been happy.” [77].

そして Catherine こそ実はこの牧師の「愛は犠牲と奉仕である」という言葉の化身である。『私はあなたのお望みのようにしたいの。もう私

7) Arthur Waldhorn's *A Reader's Guide to Ernest Hemingway*, p. 125. “His concern for her is prosaic, the product of his mind rather than his heart. Though he admits to himself preferring not to marry, he frets about the risks of their affair and thus offers her marriage. Nothing he does or says matches her fine abandon, her delight in creating a ‘home’ for him in his hospital room, her ceaseless desire to please him.”

というものはないんだわ。ただあなたのお望みのようになりたいの』
（“I want what you want. There isn't any me any more. Just what you want” [108]）. と Frederic に言う Catherine なのである。

このような二人の出発点というべきものを踏まえてその進展をたどってみよう。第三部の中程で次の会話が二人の間に交わされる。

“Couldn't we be married privately some day? Then if anything happened to me or if you had a child.”

“There's no way to be married except by church or state. We are married privately.

You see, darling, it would mean everything to me if I had any religion. But I haven't any religion.”

“You gave me Saint Anthony.”

“That was for luck. Someone gave it to me.”

“Then nothing worries you?”

“Only being sent away from you. You're my religion. You're all I've got” [117-118].

この中で Frederic は、「自分の身に何か起るか、Catherine に子供ができるかの場合を考えて内密にでも結婚したい」といつている。しかしその言葉は Catherine 自身の「自分は無宗教である」という言葉、「既に自分達は内密に結婚している」という言葉、それに「Fredericこそが彼女の宗教である」という言葉によって打消されている。しかしこれは、Frederic のまやかしであり、Hemingway のトリックであるように思われる。その理由を立証するために更に次の場面を見よう。

Frederic が前線に帰っていくために夜汽車を待つ間、ミラノの駅近くのホテルで Catherine と夜を共にするところが第三部の終りにある。二人はホテルに行く前に大聖堂のある広場にやってくる。Frederic は Catherine に、『(大聖堂)中に入りたいたいだろう』（“Would you like to go in !” [150]）と言葉をかけるが、Catherine は即座に

『いいえ』(“‘No’”) と一言だけ答えている。もしこれがこっそりと結婚するための二人だけの誓いであり、神への報告を Frederic が彼女に促すものであるとすれば、たとえ Catherine が無神論者であるとしても—— Catherine が無神論者である理由が何処にも見出せないのだが——彼女のこの flat negation はどうして生じるのか。彼女の依って立っている犠牲と奉仕の(牧師側の)立場が、どうして神に対するこのような拒絶反応となるのか理解に苦しむざるをえない。

この場合 Frederic が真に Catherine を愛し、彼女のしあわせを心から願うのであれば、彼女を説得して大聖堂の中に入り彼女のために祈ろうとしないのか。彼女は「もう私というものはない」 Frederic のためにある女なのだから彼の意志に逆らうことはない筈である。しかし実際は Fredericこそ、その本物でない愛のために誓いを恐れ、彼女に

“No”を期待しているのではあるまいか。Catherine は彼の見せかけの宗教心の仮面にあやつられているのである。

更にスイスの Montreux では生れてくる赤ん坊の将来について二人の間に次のような会話がかわされる。

“Let’s get married now,” I(Frederic) said.

“No,” Catherine said. “It’s too embarrassing now. I show too plainly. I won’t go before anyone and be married in this state.”

“I wish we’d gotten married”

“I suppose it would have been better. But when could we?”

“I don’t know” [295].

ここでも Frederic は結婚の話を持ち出している。今度は Catherine が「大きいおなか」の故に断っている。その彼女の気持は理解出来たわけではないが、しかしこのスイスでは牧師の外に誰が式に列席するというのであろうか。誰も知人はいない筈である。しかも生まれてくる子供と自分の安産のためにも、たとえ一生にこの時だけでも敬虔な気持になるのが自然である。もしも『時々雨の中に死んでいる自分をみる』(“……

sometimes I see me dead in it (rain)’” [129]) Catherineがである。

Frederic は死産であった子供について「洗礼を受けさせるべきであった」(“……he ought to have been baptized” [329]) と考え、「可愛そうな小ぢやな奴。おれの方があんな風に窒息させられたらよかつたものを」(“Poor little kid. I wished to hell I’d been choked like that” [329]), と思いながらも、すぐに「いや、それはいやだ。それでもこんな死の騒ぎはしなくてすむだろうに」(“No, I didn’t. Still there would not be all this dying to go through” [329]), と自分が子供の身代りになることをきっぱり拒否すると共に、この「死の騒動」をむしろ繁雑にさえ感じているのである。そしてこの事に関しては、Catherine が Frederic に妊娠したことを告げた後、畏にかかったような気持かどうか尋ねると、『多分少しね。しかし君の畏じゃないよ』(“‘Maybe a little. But not by you’” [142]) と答えているところにもみられる。Frederic も子供の誕生を欲していないし、Catherine も彼の気持を知っている。ここに既に Frederic の子供に対する態度があらわれているのである。

Frederic がタリメント川に飛び込んだ理由の一つに Catherine との再会の熱望があったことは事実である。彼はこのタリメント事件の前後に一度ずつ Catherine のことを回想している。一度は virgin の姉妹を車に乗せてやったことが Catherine への連想へとつながっていく。それはすぐに erotic な夢想へと走っている。「ベッドに入れば俺は体を横たえる。夫婦として。ベッドの中では(ペニス)板のように硬いのだ」(“In bed I lay me down my head. Bed and board. Stiff as a board in bed” [199])。

今一度はタリメント以後のものである。ミラノへ行く貨車の中での Frederic が、Catherine を思い出しながら masturbation をおこなっているともとれる場面である。

キャサリンのことは思い出すことが出来るが会える確信もまだないうちに彼女の

ことを考えると気が変になることはわかりきったことだ。だから彼女のことは考えまい。いや、ただちよつと考えるだけだ。ガタゴトと貨車がゆっくり走っていく音を聞きながら彼女のことだけを考え、少しばかりのあかりがキャンバスからさしこんでくるのをながめながら、貨車の床の上でキャサリンと寝ているありさまを考えるだけだ。腹ばいになったまま、あまり長くはなれていたので、考えないでただ感じているのは、この貨車の床のように冷酷なことだ。服は濡れ、そのたび毎にほんの少しだけ床が動き、内部はガランとして濡れた服と妻のかわりの床があるだけだった (I could remember Catherine but I knew I would get crazy if I thought about her when I was not sure yet I would see her, so I would not think about her, only about her a little, only about her with the car going slowly and clickingly, and some light through the canvas and my lying on the floor of the car. Hard as the floor of the car to lie not thinking only feeling, having been away too long, the clothes wet and the floor moving only a little each time and lonesome inside and alone with wet clothing and floor for a wife [236])。

この描写は抒情的ではあるがしかし sexual なものである。Catherine をおもうとすぐに sexual なものに結びつく。そしてこんな場合、彼女の身の上を案じたり、おなかの子供のことが頭に浮んでくることはない。彼女は Frederic にとっては sex と共にしか存在しないものようである。それ故にこの子供の死は主人公にとっては必要な条件となり、やがて Catherine も又彼の重荷となってくるのである。

なる程、Catherine は “The Short Happy Life of Francis Macomber” の Margot や、“Out of season” にあらわれる young gentleman の wife や、“Hills Like White Elephants” の girl のように、程度の差こそあれ主人公に反抗する女性ではない。むしろ “The Snows of Kilimanjaro” の Helen のように彼に献身する女性である。しかしこの従順で献身的な、すなわち Catherine の部類に属する Helen できえ “The Snows of Kilimanjaro” の中で “bitch” と罵られているのである。Lislie Fielder が「もし Catherine が死ななかつたら、

雌犬になる外なかったろう」 (“Had Catherine lived, she could only have turned into a bitch”)⁸⁾ といっているのもまさに至言というべきであろう。

John Killinger も Catherine の死を著者の責任と見做している。

Henry's philippic against the impersonal “they” that kill you — that killed Aymo gratuitously (sic), that gave Rinaldi the syphilis, and that now is killing Catherine — is fine rhetoric and perhaps much in place for universe without God in our time, but it is the author himself who is guilty of Catherine's death because of his fondness for the hero (Frederic Henry)……

これまでのいくつかの例でもわかるように、Hemingway は Catherine のとる行動はすべて彼女の自発的行為であるかの如く読者に示している。彼女は妊娠をつける時でさえも Frederic に責任を感じさせまいと気を使う。しかしそれはすべて Frederic の行為——あえていえば ego——を正当化するための著者の筋書きなのである。Malcom Cowley も又その点を暗に指摘している。

There is ……a symbolic reason for Catherine's death at this moment. When Frederic Henry made his farewell to armies, he became incapable of living in any sort of community, even a community of two; that is, he became incapable of lasting sexual love. Catherine has to die because the hero must henceforce live alone.

又 Catherine の死を描く Hemingway の矛盾も指摘されなければな

8) Leslie Fiedler, *Love and Death*. It is reprinted in Jay Gellen's *Twentieth Century Interpretations of 'A Farewell to Arms,'* p. 112.

9) John Killinger, *Hemingway and the Dead Gods: A Study in Existentialism*, pp. 47-48.

10) Malcom Cowley, Introduction to *The Portable Hemingway*, p. viii.

らない。彼は Frederic をして「世界は非常に善良なもの、非常にやさしいもの、非常に勇敢なものをわけへだてなく殺す」(“It (The world) kills the very good and the very gentle and the brave impartially” [252])と言わしめ、Catherineの死をこの中に含め、世界の意志に帰せしめようとしていることは明らかである。そしてそのように解釈する批評家も又多い。¹¹⁾ Catherineの死が、戦争の悲惨、恐怖に匹敵する意義をもつものだというのである。しかし果して彼女の死が Hemingway の暗示しようとする世界の暴力によるものであろうか。もしそうだとしたら Hemingway は大きな創作上の失敗をしていることになる。Catherine の hips が小さい、ということ漏らしているからである。——これは実は Hemingway が彼の二番目の妻 Pauline の hips が小さかったため、出産の時帝王切開をしたことにヒントを得たものだと彼自身語っている¹²⁾——。Catherine は彼女の hips が正常な出産には小さ過ぎるという医者言葉を伝えて Frederic に言う。『私はヒップがかなり小さいとお医者さんがおっしゃったの。だから私達はキャサリンちゃんを小さくしておくに越したことはないわ』(“The doctor said I was rather narrow in the hips and it's all for the best if we keep young Catherine small” [295])。

結局 Catherine の死はこの narrow hips による外原因は考えられないのである。世界が彼女を殺したのではなく、彼女の小さいヒップの偶然性が彼女の死を招いたのである。現に帝王切開を必要とする程小さいヒップの持主の全女性に占める割合は小さいし、更にそのために帝王切開をうけ死亡する確率は極めて少ないといわなければならない。(Pauline もそのために死んではいない。) なる程戦争——戦争が現代世界の象徴であるという判断に立てば——が彼等を結びつけ、「一緒に寝

11) Frederick J. Hoffman, *The Twenties: American Writing in the Postwar Decade*, pp. 67-72.

12) Carlos Baker, *A Life Story* (Charles Scribner's Sons, New York, 1969), p. 145.

る」(“……sleeping together” [321]) ことを促進させた面はないとはいえない。しかし Catherine はたとえ戦争はなくても「小さいピップ」*の故に死に追いやらなければならない筈である。彼女の手術をしたスイスの病院の医師の腕前がそれ程劣っていたという証拠もない。しかも場所は平和なスイスである。そしてもし、Catherine の死が彼女ばかりでなく Hemingway の他の作品を批評する場合にもよく用いられる「自然の暴力」に依るものであるとするならば、彼が描きつづけた「自然の美しさ」へのあこがれは、どのように説明されるべきであろうか。その自然も又自然の姿なのである。

Frederic と宗教

Robert Penn Warren は *A Farewell to Arms* について、「この小説はある意味では宗教的な書物である。宗教的な解決を出していないとしても、宗教的な問題が決定的な要素であることには変りがない」

(“It is, in a sense, a religious book; if it does not offer a religious solution it is nevertheless conditioned by the religious problem’”) ¹³⁾ と述べている。たしかに Hemingway はこの作品で何度も宗教について触れている。一方の極点に牧師が立ち、他方の極点には無神論者の Rinaldi を始め Frederic 以外の殆んどすべての者が立っている。そして Catherine もその一人であることは言うまでもない。それでは Frederic はどうか。彼の態度は一見 pious にみえる。彼はこの作品の初めで牧師のすすめる Abruzzi の田舎へは行かず、休暇をローマやナポリなどの歓楽の巷で過ごす。次はその後牧師に会った時の彼の報告である。

That night at the mess I sat next to the priest and he was disappointed and suddenly hurt that I had not gone to the

13) Robert Penn Warren, *Selected Essays*, (Random House, New York, York, 1958), p. 107.

Abruzzi. He had written to his father that I was coming and they had made preparations. I myself felt as badly as he did and could not understand why I had not gone. It was what I had wanted to do and I tried to explain how one thing had led to another and finally he saw it and understood that I had really wanted to go and it was almost all right. I had drunk much wine and afterwards coffee and Strega and I explained, winefully, how we did not do the things we wanted to do; we never did such things[16].

酒を飲み、コーヒーを啜り、女を抱いていながら「我々はしたいことをどうしてしないのか」又「実際は Abruzzi に行きたかったのだ」と酔っぱらって説明したところで、牧師が本当に理解してくれたであろうか。彼が Abruzzi へ行きたい気持を持っているだけで他の事は彼以外の将校達と同じことをしていながら、牧師を会食のテーブルで『牧師は毎晩五人が相手』（“‘Priest every night five against one’” [11]）とからかう将校達と Frederic がどうして区別出来るだろうか。Frederic は牧師に『私の故郷に行つて家族に会ってもらいたい』（“‘I would like you to see Abruzzi and visit my family ……’” [13]）と声をかけられることによってのみ他の将校達と区別されているのである。

しかし Frederic も巧妙に、現代人らしく、神を素直に信じられない自分の悩みを演出する。

“And if you ever become devout pray for me if I am dead, I am asking several of my friends to do that. I had expected to become devout myself but it has not come.”

I thought he smiled sadly but I could not tell. He was so old and his face was very wrinkled, so that a smile used so many lines that all gradations were lost.

“I might become very devout,” I said. “Anyway, I will pray for.”

“I had always expected to become devout. All my family died

very devout. But somehow it does not come.”

“It’s too early.”

“Maybe it is too late. Perhaps I have outlived my religious feeling.”

“My own comes only at night.”

“Then too you are in love. Do not forget that is a religious feeling” [266].

しかしこの最後の部分は、フロイドを俟つまでもなく20世紀の我々には信じ難い。しかも Frederic の愛のかたちを考えれば尚更である。Hemingway は伯爵にこのように言わせることによって Frederic に暗示と自己満足を与え、読者を欺いているように思われる。

Wylder は、Frederic が牧師を思い出しながら考える「彼はいつも私の知らないことを知っていた。私を知っても忘れてしまうことを知っていた。しかし私はその時はわからなかった。あとになってわかったのだが」(“He had always known what I did not know and what, when I learned it, I was always able to forget. But I did not know that then, although I learned it later” [17]) を引用してあたかも Frederic の開眼が行なわれたことを示唆しているが、¹⁴⁾ この作品に関する限り、最後までそれを認める箇所は見当たらない。この作品の結末の部分はそれを物語っている。

Outside the room in the hall I spoke to the doctor. “Is there anything I can do to-night?”

“No. There is nothing to do. Can I take you to your hotel?”

14) “What he learned was that the subjective loyalties were the ones of value, and that the objective view of life resulted in an emphasis on what psychologists would call the basic drives, and especially the drives of sex and self-preservation.” Delbert E. Wylder, *Hemingway’s Heroes* (University of New Mexico Press 1969), p. 81.

“No. There is nothing to do.”

“No, thank you. I am going to stay here a while.”

“I know there is nothing to say. I cannot tell you—”

“No,” I said. “There’s nothing to say.”

“Good night,” he said. “I cannot take you to your hotel?”

“No, thank you.”

“It was the only thing to do,” he said. “The operation proved —”

“I do not want to talk about it,” I said.

“I would like to take you to your hotel.”

“No, thank you.”

He went down the hall. I went to the door of the room.

“You can’t come in now,” one of the nurses said.

“Yes, I can,” I said.

“You can’t come in yet.”

“You get out,” I said. “The other one too.”

But after I had got them out and shut the door and turned off the light it was’t any good. It was like saying good-bye to a statue. After a while I went out and left the hospital and walked back to the hotel in the rain. [334—335]

Frederic は Catherine の命を取り留めることが出来なかったことに呵責を感じて胸をいためている医者に対し犒らいの言葉をかけないばかりでなく、彼の無能を責めるかの如く、ホテルまで送ろうという申し出や、手術に対する釈明の言葉も一切拒絶するのである。看護婦に対しても「出て行け」とどなるのだ。Catherine の死に対する彼の気持も理解出来る。しかしこのような態度に我々は「牧師の知っていることをあとで学んだ」という Frederic をみるであろうか。Edmund Wilson は *A Farewell to Arms* を「現代のロミオとジュリエット」だと語ったといわれる。¹⁵⁾ しかし真にそうであるならば Frederic も Romeo のように毒薬を飲んで死ぬべきであろう。(そうしないところが現代の

Romeo なのかも知れないが——) そうすれば Frederic の愛も本物であり、Catherine の美しさは、「この病室を光り輝く饗宴の間にした」¹⁶⁾ ことであろう。Catherine の死体が「彫像」に思える Frederic こそ徹底した無神論者に外ならないのである。あとに残された Catherine の死体にもし魂があるとすれば、冷たい病院のベッドでどんな気持ちで一夜を過ごしたであろうか。これが Frederic を自分の宗教にまであがめ愛した代償であるとすれば、現代の Juliet は全くあわれという外はない。

まとめ

If people bring go much courage to this world the world has to kill them to break them, so of course it kills them. The world breaks every one and afterward many are storng at the broken places. But those that will not break it kills. It kills the very good and the very gentle and the very brave impartially. If you are none of these you can be sure it will kill you too but there will be no special hurry. [252]

この部分は *A Farewell to Arms* 当時の Hemingway の現実認識の中枢であると考えてよい。それは Naturalism と *Nada* をあらわし、救いのない世界を象徴しているように思われる。しかし、既に考察してきた如く、Abruzzi の牧師は完全に否定されているわけでもなく、Rinaldi の syphilis もその原因をすべて彼のいう「世界」に帰することは出来ない。Catherine は尚更である。真に「世界」によって殺されたと考えられるのは Aymo を始め、数人のイタリア兵である。そして脱走の軍曹は、「世界」でなく、Frederic 自らが手を下したものである。Frederic も「やがて殺

15) Edmund Eilson, *Ernest Hemingway*, ed. by Mccaffery, p. 242.

16) William Shakerpeare, *Romeo and Juliet*, v. iii. 85-6.

For here lies Juliet, and her beauty makes

This vault a feasting presence full of light.

される」一人であることをほのめかしている。しかし彼の態度はむしろ「殺される前にやっつける立場」といってよいようなものである。

Once in camp I put a log on top of the fire and it was full of ants. As it commenced to burn, the ants swarmed out and went first towards the centre where the fire was; then turned back and ran toward the end. When there were enough on the end they fell off into the fire. Some got out, their bodies burnt and flattened, and went off not knowing where they were going. But most of them went toward the the fire and then back toward the end and swarmed on the cool end and finally fell off into the fire. I remember thinking at the time that it was the end of the world and a splendid chance to be a messiah and lift the log off the fire and throw it out where the ants could get off onto the ground. But I did not do anything but throw a tin cup of water on the log, so that I would have the cup empty to put whisky in before I added water to it. I think the cup of water on the burning log only steamed the ants. [329—330]

これ程明確に Frederic の態度を表明しているものはない。この部分はしばしば引用され、Hemingway の論理を示すものと考えられてきた。しかしそれらの意見はむしろこの metaphor の前半に視点が置かれていたのである。しかし重要なのはむしろ後半である。

確かに蟻は人間に警えられよう。そして火は人間を焼きつくす「世界」かも知れない。しかし Frederic にはこの場合丸太を取去って「救世主」となることも出来たのである。しかしあえて彼はそれをしなかった。否むしろ蟻に水をぶっかけて蒸し焼きにしてしまったのである。それも自分がウイスキーを飲むためにコップをからにする必要からである。

Frederic は完全に蟻（即ち一般の人間）の外に立っている。自分という個人を特別に大衆から分離し、大衆への加害者の立場にむしろ立っている。その意味で Wylder が、「彼の非難は彼自身の罪をごまかすため

の世界への挑戦」(“……his bitterness strikes out against the world to disguise his own guilt……”)¹⁷⁾ といったのは全く正しい。しかし彼が更に次のように論を進める時そこには納得し難いものがある。

Hemingway has often explained that he had recognized his own morality after he had been wounded in Italy, that he had suffered from fear, but that he had finally recognized that a man can die but once and that how a man lived and faced death was of most importance. Frederic Henry had discovered this as well, and recognized his own failure. He tells his story with bitterness as he describes the chaste world in which he and Catherine lived and loved. In the telling, however, he also describes a heroine who sacrifices for love and who faces death as bravely as Maera or any of the bullfighters Hemingway has described.¹⁸⁾

Wylder によれば、「Frederic は彼自身失敗を最終的に認識した」ことになる。「人間は死ぬのは一度だけであり、それ故に如何に生き、如何に死すべきか、が最も重要なことを Catherine によって認識させられた」ことになる。しかし彫像に別れを言うような気持で去っていく Frederic に“how to live”と“how to die”を知った者、即ち“code”を知っていた者への敬意と愛情が果して認められるであろうか。雨の中をホテルに帰っていく Frederic のうしろ姿は、なる程孤独と苦悩の表情を呈してはいるにしても、身軽になってかえって生き生きとした解放感が皮肉にもよみとれるのである。

17) Delbert E. Wyler, *Hemingway Heroes*, p. 94.

18) *Ibid.*, pp. 94-95.